

2006年出土の木簡



(桜井・吉野山)



査面積は九〇〇m<sup>2</sup>である。

調査の結果、鎌倉時代に埋没した河川の左岸と、左岸部に広がる平安時代末から鎌倉時代にかけての屋敷地を確認した。屋敷地に関する遺構は、鎌倉時代の区画溝・掘立柱建物・井戸などである。

木簡は、鎌倉時代の河川堆積土から六点出土した。今回はそのうち三点を紹介する。木簡以外の出土遺物には、瓦器・土師皿・羽釜・磁器・瓦・硯・温石・下駄・木製人形・木桶などがある。

8 木簡の釋文・内容  
(1) 「(符籙)」

(58) X (223) X 5 081

(3)

325×45×7 011

(1)は呪符木簡で、板目の薄板の片面に墨書きがある。右辺は割れで左辺上部にも欠損がある。上端には整形前の切断痕が一部残る。「戸」と「鬼」を組み合わせた符籙のみで、他に文字は確認できない。(2)は横材木簡で、上端と右辺が欠損している。各行に概ね二文字ずつ、一一行分が残る。文字は大半が消えている。(3)は完形で、

上下両端に削りの痕跡が残る。表裏とも複数行にわたって文字が記

され、梵字のような文字もある。重ね書きがあることからみて、習書木簡の可能性も考えられる。

なお、木簡の釈読にあたっては、奈良文化財研究所の市大樹氏のご教示を得た。

## 9 関係文献

奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会『平成一八年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』(二〇〇七年)

(平岩欣太)

